

ベートーヴェンを神のように尊敬し、葬儀ではたいまつを持って棺に連れ添ったほどのシューベルトだが、その音楽はベートーヴェンのように「運命に打ち勝って歓喜に至る」といった強い意志のうかがえるものは正反対の内容を持ち合わせている。他人には打ち明けられないたくさんの思いを、シューベルトはその音楽に託して訴えていたのであろう。「長調と短調の区別が不明瞭で作品の流れにしまりが無い」などと酷評されることさえあるシューベルトの音楽も「愛の歌はいつの間にか心の痛みに変わり、苦悩の歌は知らずに愛の歌となっている」と語る彼自身の気持ちと、生涯心から離れることのなかった「安息を得られない漂泊と孤独感」に思いを馳せてみると、その音楽も、もっと身近な人間味に溢れたものに聞こえてくるのではないだろうか。

フランツ・リスト

フランツ・リストはピアノを勉強する人が遅かれ早かれ遭遇し、避けて通ることのできない作曲家の一人だろう。しかしピアノニステイックな技術訓練面以外にも、リストは現在に至る音楽界に有形無形さまざまな影響を及ぼしている。

そのひとつとして、我々にとってはすでに自明のものとして誰もが疑問をさし挟まない「リサイタル」というコンサート形式を成立させるにあたって、リストが重要な役割を果たした、という事実が挙げられる。当時のコンサートは、歌あり、器楽演奏あり、ソロはもちろん、そしてアンサンブルも、といった複数のアーティストによる合同演奏会的な形式で行われていた。当然の事ながら一回のコンサートの長さもかなり

なものとなる。バラエティーに富んだものだから長くなつたのか、あるいは長さを埋めるためにバラエティーに富んだものになつたのかは「鶏が先か卵が先か」の議論にも似て、水かけ論に終わってしまいそうだがとにかくそういった既存の形式とは異なる「一人のアーティストが一回のコンサートをすべて受け持つワンマンショー」が可能な事を示した点は、ひとつの大きな改革と言えよう。それもえてして変化に乏しいものになり勝ちなピアノのソロリサイタルによって、興行的見地からもそれまでの通例をすべて打ち破る成功を収めたリストの演奏とは、いったいどのようなものだったのだろうか。いかなる要因によってリストの演奏はそれ程にまで人々をひきつけ、熱狂の嵐に巻き込んだのだろうか。

まず第一に想像されるのは、彼の華麗なるピアノの演奏技術なくしては、ここまで大きなセンセーションは起こり得なかつただろう、ということである。リストは二十才の時にパリでヴァイオリンの鬼才パガニーニの演奏に接し、多大な影響を受けた。その後リストがピアノのパガニーニたらんとして追求、開拓していった独自のテクニクは、オーケストラを彷彿ほうふとさせるまでの音響の多彩さを表現し、それまでの常人の想像をはるかに越えた世界を開くに至つた。

リストが活躍した時代から今日まで、すでに一世紀以上の時間が流れている。その間ピアノ奏法も教授法も、そして楽器そのものも進歩発展の道をたどってきたとはいえ、いまだにリストの作品には技術的に大変演奏困難なものが多い。

次にリストの音楽そのもの、また作曲という行為に対する観点と姿勢の違いも挙げられる。ベルリオーズの「幻想交響曲」に端を発する——それまでの「ソナタ」とか「ロンド」などといった楽式形態に制約されるのではなく、文芸作品や絵画等から与えられる感動をそのまま音に変換することを課題とした——一連の交響詩などに代表される音楽は、当時としては全く斬新なものであった。この雰囲気は、当然のことながら

リストのピアノレパートリーにも反映され、「メフィストワルツ」「マゼッパ」「ふたつの伝説」等々、その題材を文芸作品や宗教の世界より取り入れた作品が数多く存在する。

蛇足ながら、リストが美男子だった、ということも、彼の異常とまでいえる人気を形成する要因として見過ごすことはできないだろう。若い頃から晩年に至るまで、リストの醜し出す「黙っていても女性の方から寄ってくる」という男性的魅力は天性だったようである。ただリスト自身は生来真面目で敬虔な心を持った人物だったようで、そのあたりの事情は今日一般に誤解の多いところである。特にパリの女性ファンは、そのお国柄を反映して大変に積極的で、万事に控え目なイギリスの女性ファンの方が好ましい、とは彼自身当時の書簡の中に書いている。

リスト即レディーキラーというイメージは、彼が生涯に二人の女性——それも兩人とも知り合った時点では人妻であった——を愛した、ということによって短絡的に想像されるのだろう。普通は「愛人がいた」などと聞くと、そこに何か一種独特のイメージがつきまとうのは否めないが、リストの場合、出会いの際のいきさつはともかくとして、その後の長年に渡る交際は大変に真面目な、相手を尊重したものであった。

「美男子のアイドルピアニスト」で「人妻を愛人にしてた」と並べてみると、リストの人間と音楽は、底が浅くてチャラチャラとした、ただ派手だけが取り柄のように見えてきそうである。確かに一連の編曲物などの中には多少おぞなりなもの、単に外面的効果のみを追求した作品もなくはない。しかし実際にリストの作品に広く接し、深く研究するに従って、常にその底流にある神に対する真摯な態度は、人の心をうたずにはおかないだろう。リストの信仰は次第に深みを増し、晩年には自ら修道士となる境地に到達する。

リストは生涯のうちにヨーロッパのいろいろな国に居住した。ざっと並べてみても、生地のライディンク

という村（ウィーンの南東、ハンガリーとの国境近くにある）から始まってウィーン、パリ、ジュネーブ、ワイマール、ブダペスト、ローマ等々。それに加えて東はロシア、西はポルトガル、南はイタリア、北はイギリス、とほぼ全てのヨーロッパ諸国をピアニストとして訪問している。「国際人」のはしり、ともいえるだろう。しかしその代償として自分の安住の地、「故郷」を永遠に失ってしまった。

リストは旅行中にこじらせた風邪が原因となった肺炎によって、リヒャルト・ワーグナーと再婚してバイロイトにいた次女コジマのもとで客死している。晩年は視力も相当に衰えていたようである。華やかであった若い時に比較しても、リストが生涯を通じて与え続けてきた人間と音楽への愛情と、そのために払ってきた数多くの犠牲を考えてみても、それに見合うような安らかな最期ではなかったようだ。それは今からほぼ一世紀前、一八八六年のことであった。

ペプツパソピ。

ウィーンは今まで何世紀もの長い間、様々な文化、中でもとりわけ音楽の中心として栄えてきた。ウィーンを本拠地として活躍した音楽家を総称して「ウィーン楽派」と呼ぶこともあるが、一般的には今日に至る歴史の流れの中で特にふたつのエポックを中心に活躍した音楽家達に使用される事が多い。

そのうちのひとつは、言わずと知れたハイドン、モーツァルト、ベートーヴェン、シューベルトなどの音楽の世界である。十八世紀から十九世紀にかけて彼らが創造した芸術は、ドイツ古典音楽の最高峰として永遠に輝き続けるであろう。

もうひとつは、十九世紀から二十世紀にかけてこの地で活躍した作曲家達に対して使用される「ウィーン楽派」という名称である。前者との混乱と誤解とを避ける為に、こちらを特に「新ウィーン楽派」あるいは